遥かに比良山系

鈍色に沈んだ琵琶湖が湖西の対岸に真一文字の水平線を描いている。
その真一文字の上で、薄墨色の雪雲を溶いて流したような空に、比良山系の稜線が鋭角のジグザグを刻んでいる。
寒いばかりで積雪が少ない今年、稜線を縁取る冠雪の白さがいささか物足らない感じがあるものの、藍色に霞む山並みは湖上を覆う寒気にすくみあがっているようだ。
早咲き菜の花を狙ってカメラを抱えた人達がたむろする湖岸を離れると、誰に目を止めて貰うこともない湖岸の疎らな木立がただ冷え冷えと身を震わせている。
でも風に震える木立の枝先には微かな芽吹きの色合いが滲み始めていて、間違いのない春の到来を感知している自然の息吹が聞こえてくるようである。